

敏腕CEOと秘密のシンデレラ

プロローグ

梓が恋人の千博と逢うのは一ヶ月ぶりだ。

弟、正人の塾の先生だった彼は、塾を辞め、家業を継ぐことになった。

その関係でアメリカへ長期出張していたのだが、今日ようやく帰ってきて、逢う約束をしたのだ。千博は、大事な話があるから、と電話の向こうで言っていた。

梓にも彼の大事な話なんなのか、だいたいわかっている。千博は、アメリカでの仕事がかれからも長引く可能性が高いらしい。あつちに梓と一緒に行ければいいんだけど、と、何度も梓に、今後の計画を匂わせていた。

『一緒に行こうって言ったら困る？』

冗談めかした口調だったが、多分本気だったのだろう。梓は、彼が軽い口調を装っているのを知ること、その話をうやむやにした。

アメリカになんて絶対に行けない。

もし『俺と結婚してアメリカに行こう』と言われたら、断る以外の選択肢はないのだ。

——弟のことが最優先だもの……私が、千博さんと一緒になれないのは仕方ない。正人のお姉

ちゃんは私だけなんだから……

そう思いながら、梓は連れてきてもらったホテルの部屋を見回した。

ここは今、千博が滞在している都心の最高級ホテルだ。すれ違う顧客にも、普通のサラリーマンの姿などなかった。この階はエグゼクティブフロアだとエレベーターに表示されていたことを思い出す。

普通のサラリーマンであるはずの千博がなぜ、こんなすごい部屋に宿泊しているのだろうか。

——ここ、スイート……って言うの？ ホテルの部屋なのに、家具がいっぱいある……

梓の知らない世界が、目の前に広がっていた。

アメリカに出張するまで、彼は普通の勤め人で、とびきり格好いい以外は、ごく一般的なサラリーマンで、優しく穏やかな恋人に過ぎなかったのに……

「なんでそんな風に目を丸くしてるんだ？」

傍らの梓を振り返り、笑いながら千博が言う。彼は、梓が知っているどんな俳優よりも整った容姿の持ち主だ。

派手ではないが清潔感のある知的な美貌。いつもきっちりアイロンを掛けたシャツを着て、綺麗なジャケットを羽織っている。

背が高く逞しい身体には、無駄な肉一つ付いていない。

一方の梓は……可愛いと言われることもあるけれど、目立たないひっそりした女だ。二十歳だが、化粧はしておらず、服も何年も同じ。背のなかばまである髪は、幸い丈夫で手入れの必要がない。

小柄で、瘦せていて、目だけが大きく、年相応の華やぎには欠けて見える。

「このお部屋がすごく広いから……びっくりして」

そう言っ、梓は千博の広い肩にそっと頭を乗せた。彼にこうやって寄りかかるのが好きだ。遅しくて、百五十四センチの小柄な梓が寄りかかってもびくともしない。

——なんで千博さんは、こんなすごいホテルに泊まってるんだらう？ 今まで借りていたマンションを引き払ったとはいえ。

室内が豪華すぎてそわそわする。生活苦の梓だって知っている。こういう部屋に泊まるには、想像を絶するくらいお金が掛かることくらい。

梓は戸惑いながら、千博の肩越しにそっと窓に目をやった。

大きな、磨き抜かれた窓だ。

外には東京の夜景がきらきらと輝いている。

「逢いたかった。一ヶ月って結構長いな。時間単位に換算すると七百二十時間か」

梓の肩を抱いて、千博が笑った。塾で数学を教えていた千博は、数字が好きらしい。

一日が八万六千四百秒だと考えると、時間の捉え方や感覚が変わる、なんて、梓にはよくわからないことを言ひ出したりする。

だが、千博が魅力的な人であることは間違いない。弟の塾の面談で初めて会ったとき『塾の先生というより、王子様みたい』と思ったくらい、輝かしいオーラを放っている。

出逢っから、ひよんなことがきっかけで惹かれ合うまで、時間は掛からなかった。

——出逢って半年、付き合って三ヶ月……か。私も千博さんを好きになりすぎちゃったみたい。千博が真面目で誠実で、自分を深く愛してくれていることは梓にもわかっていた。

——千博さんには、絶対に迷惑はかけられない。アメリカと一緒に行くってのはつきり誘われたら、ちゃんと断ろう……本当は今日だって、会いに来ないほうがよかつたんだけど……。やっぱり会いたかった……

ああ、どうか彼から『一緒にアメリカに行こう』と誘われませんように。恋の終わりの日が、少しでも先になりますように。梓は心の片隅で、そう祈った。

梓の身体に回された腕に力が籠もる。顎をつ、と持ち上げられ、唇を奪われた。千博の舌が梓の唇を舐める。いつも穏やかな千博の鼓動が、どんどん速くなっていく。

キスが激しさを増してきた。舌を絡め合うのが恥ずかしくて、梓の身体が強ばる。身体中を強ばらせた梓をぎゅっと抱きしめ、千博が低い声で言う。

「ごめん梓……続きしていい？」

「っ、続き……」

『俺が泊まってるホテルで会おう』と言われた時点で、そのくらい梓も覚悟してきた。とはいえ、お洒落する余裕など経済的になくて、いつも通りの質素極まりない格好だけだ。

「うん……」

梓は恥じらいとせつなさを堪え、恋人の広く滑らかな背中に手を回した。いつ別れが決定になるかもわからないのに、好きな人に触れられるのが嬉しくてたまらない。

——私、初めて抱かれるなら千博さんがよかつたの。こんなことをするの、最初で最後だし。

梓の心の翳りには気付かぬ様子で、千博がふたたび口づけてくる。

広いベッドに組み敷かれ、梓はぎゅっと目を瞑った。のし掛かっていた身体が離れ、大きな手が不器用に梓の着ているものを脱がせ始める。

「嫌だったら、途中で言ってくれ。一応我慢できるはずだから」

彼が服を脱がそうとするのを手伝いながら、梓は頷いた。ブラウスと、スカートと、長い靴下……次々に剥ぎ取られた服が、シーツの上に投げ出されていく。

下着姿にされて、梓は横たわったまま身をすくめた。

男の人と付き合うのが初めての梓にとっては、当然、この先の行為も初めてだ。

——どんな風なんだろう、痛いのかな。

震える梓に、千博がそっとキスしてくる。

「お願い……見ないで、もつと暗くして」

引きつった声で懇願すると、千博がルームライトとダウンライトを消してくれた。それでも、窓の外の明かりで室内はほの明るい。下着姿を両腕で隠して、梓は小さな声で言った。

千博がためらいなくワイシャツを脱ぎ、アンダーをかなぐり捨てる。引き締まった身体のラインが薄闇の中に浮かび上がり、梓は戸惑って目を逸らした。

綺麗すぎる。どこにも無駄がなく、きりりとそぎ落としたような身体だ。こんな美しい身体の男の人に、自分の痩せた身体を晒して大丈夫なのだろうか。

羞恥で視線を彷徨わせる梓に、裸の千博がのし掛かった。

肌と肌が重なり、どくと心臓が音を立てた。同時に、えも言われぬ滑らかな温もりが伝わってくる。

「あ……」

触れあった場所から身体が溶けていくような、不思議な感覚だった。

ぎこちなく背中をまさぐっていた千博の手が、梓のブラジャーをそっと外した。それから、その手がショーツに掛かり、それもゆつくりと足から抜き取る。

脱がせた下着を傍らに置いて、千博が梓の腰に回した手にぎゅっと力を込めた。

むき出しの全身が、千博の裸体にぴったりと重なる。

されるがままに身を任せ、梓は力の入らない手を千博の腕に掛けた。心臓の音だけが、どんどん速く大きくなって、息苦しささえ覚え始めた。

「綺麗すぎて怖くなってきた」

梓を抱きしめたまま千博が呟く。抱き寄せられていて、彼の顔が見えない。硬直したままの梓を抱いていた彼が、意を決したように身体を少し浮かせた。

のし掛かっている彼の顔が、梓のすぐ側にある。至近距離で見てもなに一つ欠点のない、男らしく精悍な顔。

千博は、片腕で己の身体を支えたまま、もう片方の手を梓の脚に伸ばした。梓の左脚を立てて開かせ、掌で優しく内股を撫でた。たったそれだけの刺激で、梓の不慣れた身体はびくと跳ねる。

恥ずかしくて怖くて、なにもできない。声も出なかった。

千博の手は優しくゆつくりと内股を撫でさすり、さらに梓の脚を開かせた。

脚の間に、千博の身体が割り込む。

顔が熱くて、痛いほどになってきた。千博の生まれたままの身体が怖いくらい近くにあつて……

梓の呼吸が、緊張で苦しくなってきた。

「もう少し触るから」

唇を離して、千博が呟いた。えっ、と思った瞬間、梓の身体に甘い衝撃が走る。

「いや……ッ！」

千博の指先が、梓の脚の間の濡れた場所に触れた。

反射的に腰を引こうと、梓はもがく。ベッドに横たわった姿勢では逃げ場などないのに。千博の指は離れなかった。閉じ合わされた裂け目を開こうとするように、ゆつくりと未熟な花唇を撫でさする。

「あ……ああ……嫌……そこ……ああ……っ」

大きくも小さくもない乳房が、千博の厚い胸に押し付けられる。胸の先端に、今まで感じたことのないような、強い搔痒感を感じた。硬く尖ってしまった乳嘴が刺激に耐えられず、梓の身体を熱く炙る。

「……っ、あ……」

息を乱した梓は、なんとか千博の身体から逃れようとシーツを蹴った。なにをされても恥ずかし

い声が出る。

「ああ、可愛い声だな、梓の声」

千博が囁き、梓の自由を奪うようにキスしてきた。シーツに押し付けられた身体をくねらせても、どうにもならない。

脚の間を弄ぶ指が、陰唇のさらに奥へと押し込まれた。

「んろう……っ」

キスされたまま、梓は鋭い声を上げた。だが、身体をよじれば千博に触れてしまう。

無防備な肌と肌が重なるたびに、梓の身体はますます熱くなって、下腹の疼きが増すばかりだ。

「う……く……んろう……っ……っ」

くちゅ、と小さな音が聞こえた。梓の秘められた場所を暴く音。

「んん……っ」

梓は思わず、千博の裸の肩に縋りついた。

柔らかな蜜口の浅い場所を、千博の指が出入りする。梓はむき出しの乳房を押し付けていることにも構わず、両脚を震わせてその指を受け入れた。

「ん、ふう……っ……く、ふ……っ」

目の縁から涙が一筋流れ落ちる。生まれて初めて味わった刺激に、身体中が震えていた。

くちゅくちゅという音が増し、より深い場所に指が押し入ってくる。

千博の指を呑み込んでいる場所が、勝手にひくひくと収縮した。

耐えがたくなって、梓は背を反らせる。指から受ける刺激が強すぎて、腰が勝手に揺れた。

千博の指は、ますます深い場所を暴こうと、奥深くへと沈み込む。

「んっ、んろう……っ……っ」

たまらずに梓は腰を浮かせる。キスされたまま指で身体を開かれて、もがくたびに裸の身体を恋しい男にこすりつけて。身体が芯が焼けそうだった。

開いた脚がかたかたと震えた。呼吸はひどく乱れ、身体中が重くて力が入らない。膨れ上がる熱が弾けそうになった寸前で、千博の指がずると音を立てて抜かれた。

「……今度は、俺が入りたい」

唇を離して、千博が言った。その声は掠れていて、余裕がなかった。

梓は涙で濡れた顔で、こくりと頷く。ほころんだ花びらは、すでにびっしりと濡れていた。

千博が梓の腰を大きな手で掴み、昂った杭を泥濘の中央に押し付けた。

「ちゃんと付けた、大丈夫だから」

恐らく避妊具のことだろう。梓は頷き、手を上げて、枕の端を掴む。

痛くても我慢しよう、と覚悟を決めた瞬間、熱い塊が梓の身体を押し開いた。

「……………あ……っ」

「ごめん、力抜いて」

千博の片手が梓の片脚を持ち上げ、大きく開かせる。

あられない姿勢だ。恥ずかしい場所も繋がっている部分も、千博には丸見えになっている。梓

の羞恥がますます強まり、枕の端を掴む指に力がこもった。

「あ……やだ……無理かも……っ……」

ぬるつく場所がずぶずぶと肉杭を呑み込んでいく。鉄の棒でこじ開けられている気さえした。

「大丈夫、もう少しだ、ごめん、痛いのに」

梓は、指の色が変わるほど枕を掴んだ。

千博自身が、信じられないほど奥まで押し入ってくる。痛くても、彼の身体だと思おうと愛おしい。梓は緩やかに身体を開かれながら、千博のこめかみにキスをした。

唇が触れたと同時に、呑み込んでいた千博のものが、なかでひくりと動いた。別の、硬くて大きな生き物のようだった。

「……こら、そんなことされたら、暴発するから」

言葉と共に、梓の蜜口に硬い下生えが触れた。

最後まで入ったんだ、と思ったと同時に、千博が両腕で梓の身体を抱きしめた。

「梓、可愛い……なんでそんなに可愛いんだよ……」

繋がりあったまま隙間なく抱き寄せられ、梓は汗だくの身体を彼に委ねた。

「我慢できない、動いていいか？」

ようやく彼を受け入れて弛緩している梓とは裏腹に、千博の身体はだんだんと熱くなってきた。滑らかな肌はしつとりと濡れ、梓を貫く熱塊は、更に硬さを増している。

言葉が終わると同時に、硬い肉槍がずりりと中をこする。

「え……？ あ……っ……」

瘦せた脚を開かせたまま、千博が梓の身体を穿ち始めた。柔らかな梓の蜜窟は、無抵抗にその動きを受け止める。抜き差しされるたびに、耐えがたいほどに恥ずかしい蜜音が響いた。

「ああ……っ、だめ、これ……動いちや……っ、あああんっ」

濡れそぼった自身の花鬘が、千博のくれる快感を求めて絡みつくのがわかった。痛くて、違和感だらけで辛いはずなのに、それ以上の疼きが下腹部に広がっていく。

梓の身体が、何度も何度も、昂る怒張をずぶずぶと呑み込んだ。引き抜かれるたびに、たらりと蜜をこぼす。

「やあ……っ……なに……これ……あああ……っ……っ！」

繰り返し貫かれながら、梓は半身をよじった。

生々しい音は止まない。千博の荒い息づかいと、梓のうわごとのような嬌声だけが、広い部屋に満ちていく。

引き締まった身体が、梓の肉の薄い尻に当たり、艶かしい打撃音を生む。

千博がなにかを堪えるようにぎゅっと目を瞑り、強ばった怒張で、梓の一番奥をぐっと押し上げる。粘膜がぎゅっと縮まり、ぶるりと下腹が波打った。

腹の中で膨らんでいく熱が、我慢できないほど高くなる。お腹にたまった熱が弾けてしまうと、思った瞬間、千博を啜え込んだ路が、ひととき強く痙攣した。

「ああ……やだ……やだあ……っ……そこ、深い……っ」

ぐちゅぐちゅという音を聞いているだけで、どうにかなりそうだ。痛いのか気持ちいいのかわからず、恥ずかしい声が止められなくなる。

「柔らかくなってきた、梓の中……すごく気持ちがいい……」

梓は逞しい身体に縋り付き、のけぞって唇を噛みしめた。だが、甘ったるい声が唇からこぼれ落ちた。

「っ、あ、ダメ……ひう……っ……」

繰り返し刻み込まれる肉杭の熱さに、梓の身体は止めどなく震えた。

「一ヶ月も梓に会えずによく耐えたな、俺」

千博が、荒い呼吸のもと、そう口走った。彼の滑らかな額や喉には、汗の雫が浮き上がっている。形のいい眉根を寄せた顔は、強い快楽を堪えているように見えた。

しどどに濡れた蜜口と剛直の付け根が、口づけするように何度もこすり合わされる。

息が熱くて、身体がひくひくして、なにも考えられない。

「っ、あ、ちひろ……さ……っ……」

うわごとのように名を呼ぶと、千博が身を乗り出して、梓の唇を己の唇で塞いだ。

同時に、蕩けきった隘路が、ふたたび勢いよく穿たれる。

「……っ、梓、ごめん……もうダメだ」

唇を離れた千博が苦しげに言い、ぐりぐりと梓の身体を突き上げた。

下腹部の収縮が止まらない。唾え込んだ肉槍が、鉄のような硬さになって、梓の身体の奥でビク

ンビクンと脈打った。皮膚の内側に熱欲を吐き尽くし、千博が全身を使って息をしながら言った。

「ああ、可愛い……梓……」

繋がり合ったまま優しくキスをされ、梓は小さく頷いた。

「……やっぱり私、千博さんが好きだから、今日は……会いに来てよかった。」

名残を惜しむように抱き合った後、千博の身体がゆっくり離れる。朦朧とする梓の身体を拭いながら、千博が落ち着きを取り戻した口調で言った。

「大丈夫か？ 痛い？」

「ううん、大丈夫……」

ぐったりしたまま梓は答えた。千博が離れる気配がして、ごそごそと衣擦れの音が聞こえる。

「……そうだ……私……もう帰らなきゃ。」

重たい身体を叱咤し、梓も起き上がる。

ズボンを身につけ、シャツを羽織っただけの千博が驚いたように振り返った。

「梓、寝てていいよ。シャワーの準備してくる」

「ううん、いい」

梓は短く答え、のろのろと脱がされた服を身につけていく。帰りたくないが、帰ろう、と自分言い聞かせながら、よれよれの服に袖を通す。

「どうした？ 本当に寝てていいのに……大丈夫だったか？」

千博が、着替えを終えてベッドに座り込んだ梓の傍らに腰を下ろした。黒い綺麗な目にじっと見

つめられ、梓は慌てて首を振った。

「なんでもない」

「大丈夫ならいいんだけど。どこか痛かったら、ちゃんと行って」
優しく抱きしめられ、梓はもう一度首を振った。

——もう、帰ろう。

本当は帰りたくないが、仕方ない。祖父母の家に預けているとはいえ、弟を夜遅くまで待たせるのは可哀相だ。

これからますます火の車になる自分の家を……それから、まだ十三歳の弟、正人のことを思い浮かべ、恋に浮かれている場合ではないと自分を戒める。

「ごめんなさい、私もう帰るね」

その言葉に、千博が一瞬身体を強ばらせた。

結ばれたばかりの恋人にしては、梓の言葉や態度が冷たすぎるからだろう。だが、穏やかな彼は、すぐに優しい顔になって申し出てくれる。

「家まで送る。もう塾は辞めたから、正人君の『先生』じゃないし、挨拶に行きたい」

「ううん、いい、一人で大丈夫。地下鉄を降りたらすぐだから」

「そうじゃなくて……その……ご家族に挨拶したいんだ」

緊張を孕んだ千博の言葉に、梓は彼の腕の中で凍り付く。

「俺は本気で梓が好きだ。梓にはまだ早いかもしれないけど……できれば結婚したい。何年かアメ

リカに行かなきゃならないから、梓にも一緒に来てほしい」

低く艶のある声は、千博らしくない緊張を孕んでいた。

梓は息を呑む。

——ああ……

一番聞きたくない言葉だった。それを聞くのは、もう少し先でもよかったのに、と思いつつながら、梓は重い口をゆっくり開く。

「あの……前にもちよつと話したけど、私と弟は祖父母にお世話になっていて、弟が大学を出るまでは、私は結婚も引越しも無理なの」

本当はこうやって、千博と逢っていることすらうしろめたいのだ。

梓の人生は、これからもつと苦難に満ちたものになる。

なぜなら、先週、梓たち姉弟を捨てた父が亡くなったからだ。

父の顔など、もう長いこと見ていなかった。会いたくもなかった。

七年ほど前、母が病気で亡くなるや否や、父は家を飛び出して愛人のもとに走ったのだ。

父と愛人は長い付き合いだったらしい。だが父は、身体の弱い母を見捨てられないから、仕方なく養っていたと断言した。梓も正人も、愛人との未来の前には重荷でしかないと、はっきり。その日以降、どんなに泣いても父は戻ってこなかった。

母は亡くなるまで、父の愛人のことを知らなかった。それだけが梓の救いだ。

しかし、鬼畜の所業に走った父にも、多少の罪悪感があったのだろう。

父は梓と正人に、隔月で、わずかばかりの生活費を振り込んでくれた。だが死後、父の財産がまったく残っていないことが判明したらしい。

梓と正人への財産分与は一切なく、父から受け取っていたお金も、今後なくなる。

——これ以上おじいちゃんに迷惑掛けられないもの。

祖父は、下町の小さな精密機械の会社をやっている。

十年ほど前に作業場を拡張したため、居住スペースが狭くなってしまった。

そのため、梓たち姉弟は、祖父の家の隣のアパートを借りて暮らしている。

祖父の家の近辺は、最近爆発的に地価が上がった。

高級住宅街にそこそこ近かったせいで『人気エリア』と呼ばれるようになり、裕福な人たちが一気に流入し、商業施設も次々にできたからだ。

梓の財力では、祖父の家の近所だとともな家を借りられなかった。

今住んでいる、築四十年近いアパートも、隙間風が吹くほど安普請なのに、びつくりするくらい家賃が高い。

だが梓は、こんな状況ながら、お金を貯めたいと思っている。

正人は頭がいいので、ちゃんという大学に行ってほしいのだ。

高校を出てすぐに祖父の会社で働き始めた梓と、同じ道を辿らなくていい。

「梓が正人君の面倒を見なければいけないのはわかっている。おじいさんにも頼りすぎたくないだろう？ だから、正人君の学費と生活費は俺が負担しようと思うんだ」

驚いた梓は慌てて首を横に振る。

「駄目、正人はまだ十三歳だし、大学に行かせたいから無理よ」

「それでいい。大学を出て、一人暮らしを始めるまで俺が支援するよ。心配しなくていい」

「……だから、それは……駄目だってば……」

梓は更に首を横に振った。

もしかして、千博はいい家の息子さんなのかな、とうつつすら思う。だから、こんなホテルにも泊まれるし、梓や正人を支援すると気軽に言うのだろうか。

でも、それはできない。

結婚早々、夫のお荷物になりたいわけがないからだ。

それに、梓の実家の悲惨な状況を見たら、優しい千博だって逃げ出すかもしれない。

——好きな人に裏切られるのが怖い。千博さんに『やっぱり駄目だった』、なんて切り捨てられたら、耐えられないもの……お父さんのときみたいに、見捨てられるのはもう嫌。

だから梓は、自分を守るほうを選んできました。

「そういうこと、されたくないの。私たち、付き合って三ヶ月しか経ってないのに」

千博だってまだ二十六歳だ。

中学生の正人の生活の面倒を見るなんて、想像を絶する負担になるだろう。いつか梓と正人を足枷のように感じる日が来るはずだ。

——ああ、今日逢いに来た私が馬鹿だった。ごめんね、千博さん……

梓は氣力を振り絞り、千博の言葉を突っぱねる。

「アメリカには一緒に行けない。正人も連れていくなんて、そこまで頼れないよ。……ごめんない。結婚とか考える余裕なくて……本当にごめんない」

これで終わり。決めたとおり、プロポーズを断らなくては。

我ながら冷たい女だと思う。だが胸がいつぱいで、千博を氣遣う余裕もない。

梓は呆然と自分を見上げる千博に背を向けた。

自分勝手なひどい彼女だったと思つて忘れてほしい。

「今までありがとう。三ヶ月だったけど楽しかった……じゃあ、さようなら」

「あの、ちょっと待つてくれ、梓」

「……付いてこないで。一人で帰りたいから」

梓は凍り付く千博に背を向けて、ホテルの部屋から飛び出した。

——初めて付き合つた相手が、優しく私を大事にしてくれる人でよかった。

これから先、梓は多分、結婚できない。

少なくとも向こう十年分の自分のお金と時間は、弟を大学に行かせて、立派な会社に入れるために使う予定だからだ。それに、こんなにひどい形で千博を振つた人間に、幸せになる資格もないと思う。

そう思いながら、梓はエレベーターに乗り込む。

一人になつたら、涙が出た。梓は、バッグから取り出したハンカチで目を押さえた。

——なにをしてるんだろう、私。来なければよかった。でも……今日、会えて嬉しかった。

梓は唇を噛みしめる。

覚悟を決めたつもりだったのに、予想以上の喪失感で、胸に穴が開いたように感じる。

——家に帰る前に、顔をなんとかしなきゃ。もう終わり。もうこれで忘れるの。千博さんを、私の家の事情には巻き込めない……私から去つていく千博さんを……見たくない……

こうしてちっぽけな女の短い恋は終わった。

生活の余裕などなかったのに、本気で恋をしてしまった。それが梓の犯した過ち^{あやま}だった。

その後、千博から何度連絡があつても、一度も返事はしなかった。それが梓の、唯一の意思表示だ。

やがて千博からの連絡は途絶え、梓にも『新しい人生』が始まつた……

第一章

「ママー！」

「家の中では走っちゃダメ」

梓の小言に、娘の百花^{ももか}がピタリと足を止めた。

娘の百花は今年六歳。

弟の正人や祖父母からは「モモ」と呼ばれて可愛がられている。

名前は父親の千博から一文字ももらって……と言いたところだが、別れたまま連絡も取っていない相手なので、千ではなく、百にした。

梓が付けた名前は、百花。鈴木百花、だ。

平凡な名字と少し変わった名前を組み合わせを、梓は気に入っている。

——大きくなったなあ。なんだかしみじみしちゃう。

去年買った長袖のトレーナーが、ちよつと短くなっていた。

せつかく可愛いのに、いつも安物の服ばかりで申し訳ないと思いつつ、梓は百花の頭を撫でる。

妊娠がわかったときは、祖父母も弟も絶句していた。もちろん梓もだ。避妊はしてもらったのにどうして、と悩んだ。そして、中絶するしかないと思った。

だが、ちょうどその頃奇跡的に、祖父の会社に新しい大口取引の話が入ったのである。

祖父の会社は昔ながらの小さな町工場で、『鈴木製作所』という。

企業からオーダーを受け『型』を作る製作所だ。

例えば車のエアコンの温度調節つまみや、スマートフォンの背中部分の板。

祖父は製品のパーツの中でも、制作するのが難しい型作成、いわゆる『腕のいい職人さん』にしかない仕事』を引き受けていた。

梓の母が亡くなった頃は、不況のせいもあり経営状態がよろしくない時期が続き……そこに孫二

人が転がり込んだのだから、更に大変になった。

しかし百花がお腹にやってきた頃から、新しい仕事が増え出して、状況が上向いた。

相変わらず苦しい生活だったが、三食ちゃんと食べられて、週に一度は外食もできるほどになったのだ。

『神様がその子を育てろって仰おしやっているんだろ。そうとしか思えない』

祖父は言い、祖母と弟も同意してくれた。

とくに十三歳の弟、正人が強く後押ししてくれたのだ。

『俺がもつと姉さんを手伝うから。赤ちゃんも俺が学校から帰ってきたら面倒見る』

どうやら正人は、正人なりに悩んでいたらしい。

両親を亡くしたせいで苦労している姉の姿に、辛い思いをしていたのだと思う。

それに多分、梓に秘密の恋人がいて、その相手をとっても好きだったことも、正人は気付いていたのだろう。姉が、心の中では赤ちゃんを産んで育てたいと思っただけのこと。

頑が頭として父親の名を口にしない梓に、正人は『無理に言わなくてもいいよ』と告げた。

そして、『俺は、これ以上姉さんが辛い思いをするのは嫌なだけ』と言ってくれたのだ。

皆にたくさん助けられ、迷った末に子供を産むことにした。

梓はもう、誰とも結婚しないと決めている。

千博と別れた後は、異性に興味がなくなってしまうからだ。テレビで格好いい芸能人を見てもなにも感じない。心に穴が開く程度には、千博が好きだった。

——お医者さんは、きちんと避妊具を使っても、稀まれに赤ちゃんができることがあるって言った。多分、この子、絶対生まれたい理由があるんだろうな。この世界でやりたいことがあるんだ。

そして、月満ちて、百花は元気に生まれた。

千博に迷惑をかけてしまうから、父親が誰なのかは口が裂けても言わない。だから勝手に育てることだけは許してほしい。そう思いながら、梓は百花のママとしての人生を始めた。

シングルマザーになったことを批判する人もいたが、応援してくれる人もいた。

祖父母も正人も、近所の人も、百花を可愛いと言ってくれる。

だから、『家族とモモが平和なら充分だ』と思い、不愉快な言葉は受け流して生きている。

もちろん傷つくこともあったし、ご近所の悪口おばさんには『男遊びが激しいんだろう』なんて言いがかりを付けられていて、うんざりすることもある。

だが、それは仕方ないのだ。無責任と批判されても、笑って流すしかない。

産んだのは梓の勝手だ。百花の人生はもう始まっている。

梓にできることは、百花をいい子に育てることだけだからだ。

「いつも言ってるでしょう？ 上のお家に響いちゃうから、ドタバタしちゃダメよ」

このアパートは築四十年を超えている。

百花が生まれる前から住んでいた手狭な室内は、今や百花と正人と梓の持ち物でいっぱいだ。

引越したいのはやまやまなのだが、祖父母の家から離れてしまうと思うとなかなか踏み切れない。

「わかった！ ごめんねママ、静かに歩く！」

百花が大きな目でウインクしてくれた。

親馬鹿かもしれないが、百花は相当な美人だと思う。

さらさらの黒い髪はおかっぱで、黒目がちな大きな目は長いまつげに縁取かみどられている。

色白で愛らしく整った顔は、お人形のようにだ。

梓には若干似ている気がするのだが、千博にはまったく似ていない。

お陰で、父親が誰なのか、誰にも知られていない。塾で千博に勉強を習っていた正人ですら気付いていない。

それに百花は、ママの梓もびつくりするほど気立てがいい。

赤ちゃんの頃から手が掛からなすぎて、保健師さんに『片親だから、私が苦勞してると思ってたを遣っているんでしょうか』と相談し、笑われたことさえあるくらいだ。

「ママ、アイス食べていい？」

古びた冷蔵庫を開けながら百花が言う。なるほど、珍しく家にアイスがあるから興奮していたのか、と思いつつ、梓は笑顔で頷いた。

「一本だけよ。正人にも取っというてあげて」

「はいー！」

百花が冷凍庫のドアをちゃんと閉めたことを確かめ、梓はふたたびノートパソコンに向き直り、仕事の資料に目を落とす。

——『すーじい』、意外と売れてるなあ……

祖父がご近所の『凄腕^{すじょう}だけど零細^{れいさい}企業』の職人さんたちと組んで作った玩具^{がんぐ}『すーじい』の売り上げを見つつ、梓は腕を組む。

思えば、百花が生まれてから、祖父の会社はもう駄目だという局面をギリギリで回避してきた。祖母が『モモちゃんがラッキーを運んできてくれるのよ。やった、今年も生き延びた!』なんて言うくらいに。

今回のすーじいの件もそうだ。

すーじいは、『俺らもそろそろ引退だから』が口癖のご近所さんが、謎の本気を結集して作った、電卓……のようなものである。

見た目は透明。この透明がすごい。樹脂なのにクリスタルガラス並みの透明度だ。透明な氷の中に、数字や文字だけが浮かんでいるように見える。使われているフォントも樹脂も特殊液晶も、祖父や友達のご近所のじい様たちが開発した品物だ。

ちなみに、すーじいのパーツの型加工を担当したのが祖父である。

すーじいが完成したとき、祖父と仕事仲間は高価な日本酒を開けつつ『こんなに透明なまま成型できたのはすごいなあ!』『いや液晶が見えやすいよ!』『この樹脂は光の透過率が高い』などと、マニアックに熱く讃^{たた}え合っていた。

多分、すーじいを作るのが楽しかったのだろう。

——おじいちゃんたち、すごいよなあ。すごいけど、使い道があまりないのがもったいないかも。

そう思い、梓は一人微笑んでしまった。

祖父やその仲間たちは、すごい技術を持っている。普段は怖い顔のおじい様たちなのに、こんな遊び心も忘れていないのだ。

「ママ、すーじいかして」

アイスをあつという間に食べ終わった百花が、梓の横にちょこんと腰掛けた。

小さな手でちゃぶ台の上のすーじいを取り上げると、左上の花のような模様を押す。

途端にすーじいの画面がきらきらと輝き、電卓ではない別の画面が表示された。

「ハードモードやる」

百花が吹きながら、素早く画面をポチポチ押していく。

今すーじいの画面に表示されているのは、魔方陣だ。正方形のますが縦横それぞれ三つ連なり、縦も横も、足し算の結果が同じ数字になるように、空いたますを埋めていくパズルだ。

——速いなあ……解くの。この子、計算が速いんだよね。

梓は百花を横目で見守りつつ、感心する。

学校の先生からも『百花ちゃんは算数がとても得意なので、お家で上級生向けのドリルをやらせてもいいかもしれません』と言われたくらいだ。

ひとしきり魔方陣で遊んだ後、百花がもう一度左上のマークを押す。今度は、出された計算問題の答えを四択の中から選ぶゲームだ。

百花は瞬^{まはた}きすらずに、夢中でやっている。

——モモ、貴女の計算が速すぎて、ママは付いていけないんだけど。内心焦りつつ、梓は娘の賢さに改めて唖うなった。

——千博さんに似たんだろうな。頭がいいところ。

今では別れた元恋人のことも穏やかに思い出せる。彼と連絡を取る気はない。のだが……梓は百花が集中しているのを確かめ、スマートフォンで百花の父親の名前を検索する。

『齋川千博』

出てきたのは数年前のビジネス情報サイトのインタビュー記事だ。

千博の写真が載っている。

うつとりするほど整った顔立ちと、落ち着きある雰囲気は変わらない。

——まさか、千博さんが齋川グループの御曹司だったとは。なんでこんな本物のお坊ちやまが、下町の塾講師なんてやっていて、私と付き合ったりしたんだろう？

若気の至りで『結婚したい』と言われたことを思いだし、なんとも言えない気分になる。

齋川グループは鉄鋼業を中心とする巨大グループで、機械メーカーや建設会社など多岐たきにわたる子会社を抱えている。

梓が住む場所が地べただとしたら、彼が住んでいるのは雲の上。別世界の住人だ。

それに、このインタビュ記事を最後に千博の情報は出なくなったので現在のことはわからないが、もう結婚したのではないだろうか。

梓より五歳年上の彼は、もう三十三のはず。周囲が放っておくはずがないからだ。

——私たちも、ようやくまともに暮らせるようになってきたんだもの。波風は立てたくないから、連絡はとらないつもり。……モモ、ママしかいなくてごめんね……

夢中で遊んでいる娘の横顔を見守りつつ、梓は心の中で謝った。

百花の親権がどうの、と揉めるのも嫌だし、お金目当てで名乗りを上げたと思われるのも嫌だ。

百花と正人と自分、そして祖父母と会社……今ある平和を守ればそれでいい。

そのときふと、百花がスマートフォンと梓の身体の間割り込んできた。画面に素早く目を走らせ、嬉しそうに叫ぶ。

「あ、パパと同じ名前だ、ちひろ！」

確かに百花には、父親の名前だけ知らせている。

漢字も一度だけ紙に書いて教えた。万が一、梓が不慮の事故で遺言も残せず死んだら、誰も百花の父親のことを知らないままで終わってしまう。

それでは百花が余りに可哀相かわいそうだと思つて、つい教えてしまったのだ。

正人は塾で数ヶ月お世話になっただけの、『先生』の名前なんて知らないし、問題はない。

——まだ、ちゃんと覚えてるね。教えたの四歳くらいのときなのに。

「そうだよ。頭いいね、モモ」

梓はせつなさを誤魔化すように百花を褒め、そのままさりげなくスマートフォンの表示をオフにした。同時に玄関の扉が開き、若い男の音が響く。

「ただいま」

弟の正人だ。大学帰りに本屋に寄ってきたらしく包みを抱えている。

「お帰り。ご飯にしようか」

梓はそう言って立ち上がるうとした。しかし正人は首を横に振り、腰を下ろさず梓たちに背を向けた。

「俺が作るよ」

なんだか申し訳ない気分になる。正人は二十歳とは思えないくらい大人だ。料理も洗濯も掃除も、下手すれば梓より得意だ。

百花の面倒を見るためにバイトは内職を選んで、夜は家を空けないようにしてくれる。

本当なら家事なんて母親に丸投げで、夜中まで友達と遊んでいる年代だろうに。

「いいよ正人。お姉ちゃんを作るから」

「昨日も二時くらいまでなにかやってたじゃん。倒れられたら困るから休んでよ」

そう言って正人が台所に入っていく。無邪気な百花が立ち上がり、すーじいを持って正人の所へ駆けていった。

「マー君、ハードモードがクリアできた！」

「お、すごいじゃん」

「次はウルトラハードやるの！」

「頑張れー、あ、そうだモモ、コーンの缶詰取ってくれる？」

正人は嫌がらずに百花の相手をしながら、料理を始めたようだ。

——あの子たちを精神的に大人にしてしまっているのは、私なんだろうな。

梓がいまいち頼りないから、正人にも百花にも、べったり甘えられる相手がいないのかもしれない。だから二人はしっかり者なのかもしれない。

——もっと頑張らなきゃ。

台所の音を聞きながら、梓は人知れずため息をついた。だが、ぼんやりしている時間がもったいない。正人の言うとおり、今日は早く眠ろう。

——じゃ、ありがたく仕事を進めちゃおう。

会計ソフトを開き、祖父の会社の事務作業を進める。

熱中しているうちに三十分以上経っていたらしい。正人が大きなお皿を手に、百花と一緒に戻ってきた。

「ママ、今日はパスタだって」

「モモがコーンの缶詰開けてくれたよ」

正人と百花が、笑いながらちやぶ台の上にお皿を並べ始める。

「モモ、フォークとスプーン持ってきて、三本ずつ」

「わかった！」

正人の言葉に、百花が元気いっぱい台所へ歩いていく。手にはすーじいを持ったままだ。本当にお気に入りらしい。

今夜のメニューはペペロンチーノ。百花が好きなコーンが入っている。正人は、料理もそこそこ

上手だし、百花にも優しいし、自分にはもつたないくらい弟だ。

戻ってきた百花が、梓の前にスプーンとフォークを並べてくれた。

「はいママちゃん、パソコンは片付けてちょうだい」

祖母そっくりの口調に梓は思わず笑い、ノートパソコンをテーブルから床に下ろした。

「すごいね、美味しそうだね、モモ」

「トウモロコシ入れてもらった！ 英語だと、コーン！」

すーじいを膝の上に置き、百花が頬をピンクに染めて手を合わせた。

「いただきます！」

百花が子供用のフォークで器用にパスタを食べ始めた。こぼさないかをチラチラと見守りつつ、梓も早速食べ始める。

そのとき、食事の手を止め、正人がふと気付いたように言う。

「そういえばさ、ネットですーじいが紹介されて、けっこう売れたんだろ？」

正人の言葉に、梓は頷いた。

「ええ。そうなの。売れると思わなかったけど」

百花の膝の上に載せられた、大きな樹脂の板に視線をやり、梓はしみじみ呟く。

『マニアック道具大全』というのは、マニアに絶大な人気を誇る個人サイトだ。

サイトの管理人が気に入った『道具』であれば、なんでも紹介される。

日本には数十本しか入ってこない万年筆だったり、こだわりの活版印刷ノートだったり、素人に

は到底作れないような宝石そのもののキャンディだったり。あるときは『付ける人によって香りの変わる秘伝のコロン』なんてものも紹介していた。

珍しい物、他の人と違うこだわりの品がほしい！ という人に人気のサイトだ。

このサイトで紹介されたことで人気が出て、生産が追いつかないほどになった品もたくさんある。

多くの企業がサンプルを送っていると噂だが、紹介されるのは、サイト管理人の『こだわりっ子』を名乗る人物が気に入った品だけなのだ。

その有名サイトに、ある日、すーじいが紹介された。

『世界レベルの技術の無駄遣い。だが管理人的にはそれがいい。樹脂の透明度も反応速度も、液晶の表示がクリアで見やすいのもすごい。道具としては意味不明なのに端々まで気配りが行き届いていて無駄にすごい！ 管理人のお気に入りです。電卓として使っていると、会社の人にびっくりされます（笑）』

という褒めているのか微妙な紹介文だったが、世間の物好きの心を騒がせたらしい。

ハンドクラフト通販サイトの片隅で細々と販売していた『すーじい』は、サイトでの紹介後、登録分の七個を即日で売り切った。

『一万五千円でもほしい人は買っただねえ』

祖父も目を丸くしていた。もともと利益度外視で、祖父が近所の仲間と一緒に、暇な時間にならなくなったモノだ。

売れなくてもそれはそれで自分たちの記念に、と言っていた品なのに。

『もうちょっと、追加で販売登録してみようか』

おそろおそろの追加で作った二十個も、予約完売した。

むしろ『買えなかった！ 値段上乘せでいいから売ってください！』というメールまできたほどだ。

世の中には『自分が気に入った珍しいモノ』にはいくらでも出す趣味人がいるのだと、梓は初めて知った。

食事を終えて後片付けを済ませ、お風呂までのひと休憩の時間に、梓はふたたびパソコンを開いた。

すーじい販売サイトの『再販希望コール』の内容を確かめる。

——再販しても売れなかったら困るし、どうしよう。

悩みつつ、今度は祖父の会社宛のメールを確かめた。

取引先からのメールで重要なものを印刷して、翌朝祖父に渡すためだ。

メールの処理は梓の仕事だ。祖母はパソコンが苦手なので仕方がない。

——あれ、珍しく会社宛に問い合わせがきてる。営業メールかな……

梓は一応そのメールを開いて見てみた。

送り主は『坂本有樹』。知らない男性名だ。本文を見ると、『マニアクク道具大全』の管理人です、とある。

——すーじいの恩人の人……

驚いてメールに目を走らせる。そこには挨拶文と自己紹介の後、こう書かれていた。

『私、実は、株式会社ガレリア・エンタテインメントというところで働いています。ソーシャルゲームの「アンガールミット」をご存じでしょうか。日本ですでに三百万以上ダウンロードされている大人気ゲームで、私はそのゲームのディレクターの一人です』

おそらく、スマートフォンで遊ぶゲームのことだろう。

梓は忙しくてやっついていないが、正人は知っているはずだ。

「ねえ正人、アンガールミットってゲーム知ってる？」

「知ってるよ。どうしたの？」

寝そべってスマートフォンを見ていた正人がこちらを向く。

「有名なゲームなの？」

「最近出たゲームだけど、かなり遊んでる人多いと思うよ。テレビCMもやってるし」

「ガレリア・エンタテインメントって有名な会社よね。アニメとかも作ってるのよね？」

「そうだよ。モモが見てるアニメの最後に名前出ていたし、大きい会社だと思うよ」

なるほど……と思いつつ、梓はメールの続きを読む。

すーじいに使われている樹脂や液晶の技術の素晴らしさを感じ入り、面白いモノを作ろうという御社の心意気に惹かれたので、アンガールミットのイベントで販売するグッズの開発をお願いできないか、という内容だった。

『私たちはアンガールミットを三年後までに、国内売り上げトップ五に入るソーシャルゲームに育

てたいと思っています。そのためにはゲームの品質向上だけでなく、リアルで実施するユーザー向けイベントや、グッズの拡充も不可欠です。よろしければお話だけでも聞いて頂けないでしょうか。鈴木製作所様のお力も發揮して頂けるのではないかと思います』

文面を見る限り、坂本はしっかりした人物のようだ。

『株式会社ガレリア・エンタテインメント』のサイトにアクセスしてみると、すごくお洒落でびっくりする。サイトにも、とてもお金が掛かっているのがわかる。

——と、とにかく、このメールをおじいちゃんに見せないと……！

梓は慌ててメールの本文をプリントアウトする。もし上手くいけば、少し祖父母の生活が楽になるかもしれないと思うと、胸が弾んだ。

「ママ、なにそれ」

好奇心旺盛な百花が、早速小さな頭を寄せてくる。

「お仕事のお手紙よ。明日おじいちゃんに見せるの」

答えると同時に甘い気持ちが入み上げる。辛いこともたくさんあるが、やっぱり百花は可愛い。なにかあっても百花だけは幸せにしなければと思う。

——ママのせいで苦労させられないものね。モモはなにも悪くないもの。

そう思いながら、百花の丸い小さな頭を撫でた。

何度かのやり取りの末、坂本が打ち合わせに指定してきたのは、半月後の金曜日だった。

祖父とその仲間、すーじいを開発したご近所さんたちと一緒に、梓はガレリア・エンタテインメントにお邪魔することになった。

坂本とのメールのやりとりを担当していたので、失礼のないよう梓もご挨拶を、と思ったのだ。

——うわ、すごいビル……

ガレリア・エンタテインメントは、六本木の高級複合施設の中に会社を構えていた。

梓の住んでいる場所は、いわゆる「ここ十数年で人気が出て、高級住宅地になった」場所でも下町の風情がたっぷり残っている。だが六本木のこの辺りは雰囲気が違う。

子育ても仕事も自宅近辺で済ませる梓は、滅多に地元を離れないので緊張してきた。

振り返ると、祖父や、祖父の仕事仲間たちは、うきうきした様子で案内された顧客ブースの中を見回している。

「金っていうのは、あるところにはあるんだなあ」

祖父の茂が、感心したように呟いた。他の人たちもうんうんと頷く。

「ゲームって儲かるんだな。うちも孫が夢中でやってるよ」

「シゲさんこの技術とか、使ってもらえるんじゃないの。あれホントいいものだもん」

祖父の知人の一人が、期待を滲ませた声で言った。確かにこんな大きな会社から仕事をもらえれば、この先数年の展望が明るくなる……かもしれない。

——職人さんを大事にして、上手く付き合ってくれる担当者様だといいな。最近の企業はコンプライアンスを順守することにするさくなつたから、そうそうトラブルはないと思うけど。

「そういえばさ、ここ、去年齋川グループが買収したんだってな。本当に収益がいいんだろう」
ふと思いついたように祖父が言う。

齋川グループ、という名前に、梓の身体が一瞬だけ硬直する。

——千博さんの実家の会社だ。

そのとき扉がノックされ、三十代なかばと思われる、カッターシャツにソフトジャケット姿の男性が笑顔で姿を現した。

「初めまして、坂本です」

梓たち一行は、立ち上がって頭を下げる。坂本は爽やかで知的な男性だった。ネットで調べた情報によると、ガレリア・エンタテインメントで働いているのは、選りすぐりのエリートばかりだという。ディレクター職の坂本は相当優秀な人材に違いない。

名刺を交換し終えたとき、もう一人が足早に顧客ブースの入り口に現れた。

「ごめん、前の打ち合わせが長引いて」

現れたスーツ姿の長身の男性が、坂本に申し訳なきように言った。

その人物に頭を下げ、坂本が丁寧「こちらがグッズの素材関連で協力をお願いする方たちです」と紹介してくれた。

——嘘。

信じられないものを目にし、梓は反射的に後ずさった。目の前のスーツ姿の男は、ひっそりと端にたたずむ梓には気付かず、祖父たちと名刺交換を始める。

頭ががんにんして、周囲の声が聞こえない。

名刺交換を終えた彼は、最後に梓に向き直った。

清潔感のある整った髪形に、きつちりと着こなした控えめだが上質そうなスーツ。

地味にも見える格好が、容貌の美しさを引き立てている。精悍な美貌に切れ長の黒い目。一人一人に真面目に挨拶をし、丁寧に名刺を確認するその仕草も、昔のままだ。

——嘘……でしょ……

背の高いその男性は、七年ほど前に別れた、百花の父親の千博だった。

目の前の千博の顔から、礼儀正しい笑顔がすうっと消える。

顔を強ばらせた彼は、すぐに気を取り直したように笑みを浮かべ、梓に名刺を渡した。

「こんにちは、CEO——代表取締役社長の齋川です。……正人君のお姉さんですよね」

声こそ丁寧で柔らかいものの、視線は射貫くように梓を見つめていた。

千博の視線が、梓の左手に走る。

荒れた小さな手にはネイルも、アクセサリーもしていない。梓の目には、千博の表情が、一瞬だけほっと緩んだ気がした。

皆に背を向ける姿勢なので、誰も千博の表情に気付いていない。

——CEO……この会社の代表……？

とっさになにも言えず、梓は千博を見つめ返した。クールで穏やかなまなざしの奥に、得体の知れない熱を感じて動けない。

妙な気配を察したのか、坂本が不思議そうな声を上げる。

「CEOのお知り合いですか？」

「ああ、大学を出てすぐの頃、塾講師をしていたって言っただろう？ 鈴木さんは俺の教え子のお姉さんなんだ。何度か進路面談に来てくれたから、たまたま覚えていて」

その言葉に、祖父がぱっと顔を輝かせた。

「あれ、社長さん、正人の塾の先生だったんですか」

千博が祖父のほうを見て、明るい声で答える。

「はい。知り合いの方がいらしたので驚きました。……これもなにかのご縁ですね」

一気に、緊張していた場の空気が和らぐ。ほっと息を吐いた梓は、周囲に異変を悟られないよう、千博の広い背中にそっと視線を投げかけた。

——大丈夫よね、モモと千博さんのこと……誰にも気付かれないよね。

「CEOは、社外の方との初回の打ち合わせには、必ず同席されるんですよ」
坂本のハキハキした説明が聞こえ、梓は唇にだけ愛想笑いを浮かべた。

心臓の音が大きく頭の中に響く。驚きと戸惑いで頭の中は真っ白なままだ。

——どうしよう、モモのことになにか言われたら。

しばらく考え、大丈夫だと確信する。

百花は千博とまるで似ていないからだ。

毎日百花に接している祖父だって、千博がひ孫の父親だなんて気付かないだろう。

——うん、本当に、全然似てない……誰も気付かない。大丈夫！

久しぶりに千博の顔を見て、梓はそう確信した。

第二章

ガレリア・エンタテインメントでの衝撃の再会から数日後。

梓は、ノートパソコンの前で凍り付いていた。

『鈴木さん、久しぶりにお会いできて嬉しかったです。急で申し訳ないのですが、よかつたら明日の夜、食事に行きませんか』

メールの差出人は、齋川千博。

渡した名刺のアドレス宛に届いたお誘いだ。なんと返事をしていいものか迷う。

梓は、取引先の男性に誘われたときは基本、角が立たないように断っている。

大概の『下心』がある男性は『子供がいて、夜は時間が取れない』と言うと引き下がるのだが、

今回の相手は千博だ。

結婚したって言い張ろうかな、と思った瞬間、打ち合わせのあの日、千博の視線が左手の薬指に走ったことを思い出す。

彼は梓が結婚していないと確信して誘ってきたのだろう。

実は結婚していると偽ったとしても、子供はいくつか、とか、色々聞かれたらいつかボロが出そうで怖い。梓は嘘が苦手なのだ。

ましてや梓は、今でも千博に罪悪感を抱いている。彼はなにも悪くないのに、梓の事情で一方的に別れてしまったからだ。更にそこに嘘を重ねるのは心苦しい。

——一回だけ行って、当たり障りのない話をして帰ろうかな。きつと千博さんも、懐かしいから声を掛けてきただけだと思うし。女性を一对一で食事誘うってことは、彼も結婚はしてないのだからうし……。大丈夫かな……。うーん、よくわからなくなってきた。

ぐるぐる始めたところに、パジャマ姿の百花がちよこちよこやってきた。

「ママ、寝る前にコーヒー牛乳飲んでいい？」

梓はノートパソコンを閉じ、百花に言った。

「寝る前はダメ。なにが入ってるから駄目って教えたっけ？」

「さとう」

真面目な百花の答えに、梓は噴き出す。

「違うでしょ、カフェイン。眠れなくなっちゃうよ」

「そっか、カフェインか。まちがえた！」

百花が、座布団に座っている梓の首にぎゅつと抱きついてきた。

「お水飲んで寝なさい。もう歯磨きしてでしょ？」

「あのおさ、ママ。あした段ボールがいるんだけど」

百花が梓から離れ、突然正座する。唐突な娘の報告に、梓の動きがピタリと止まる。

——えっ、そんなの連絡メールに書いてあったかな？

梓は慌てて、急に礼儀正しくなった百花に尋ねた。

「学校で使うの？」

「はい、使います。工作で」

——いけない、ホントだ……。先週のメールを見落としてた！

梓は慌てて立ち上がった。三十センチ四方の、正方形の段ボール紙なんて、作らないとない。大きさを指定が妙に細かくて大変だ。

「モモ待ってて、おじいちゃんのところ探してくる。正人、ちよつとモモ見ててくれる？」

梓の声にふすまが開き、うたた寝していたらしい正人が部屋から顔を出した。百花を正人に預け、梓はアパートを飛び出す。

——グダグダ悩んでる時間は、私にはないな……。お仕事もらってる会社の社長さんだから、一方的に断るのめ気が引けるし……。明日適当にお食事して、さくつと帰ってこよう。子供の話を理由に断るのは、やぶ蛇になりそうだからやめたほうがいいよね。

メールの返信を忘れないようにしなくては、最近色々忘れっぽくて困る、と思いつつ、梓は隣の祖父の家へ駆け込んだ。

「ねえ、おばあちゃん、段ボール箱ある？ 明日モモが学校で使うんだって」

翌日の夕方。

祖父の会社の事務仕事を一度切り上げた梓は、食事会に向かうための身支度を終え、学童から百花を引き取って、ふたたび祖父の家へ向かった。

「ママの指、痛そう……ごめんね」

百花が梓の手を見て眉をひそめる。

「ううん、平気。ママが不器用なだけだから」

情けない気持ちで梓は首を振った。

百花の相手をしつつ、まだ少し残っていた仕事を手早く片付けていく。

——昨晚は結局、段ボールを三十センチの正方形に切るのに、異様に時間が掛かってしまった……

梓の指は何枚も絆創膏ばんそうこうが貼られている。箱になった段ボールを分解するときに、一度ならず切ってしまったのだ。更に、三十センチの正方形にするのに失敗し、数箱は無駄にした。

——段ボールって、結構手をスパスパ切っちゃうのよね。モモには危なくてさせられないなあ。私がついてよかった……

その後は力尽きて千博へのメール返信を忘れ、朝の九時過ぎに連絡をして、昼過ぎに返事がきた。ありがとう、という言葉と共に、レストランの場所が少しわかりにくいので、会社の側のカフェで待っていてほしいと記されていた。

今日の格好は、人と会うのに一番無難ぶなんな服……とはいえ、地味極まりない安物の上下黒のセット

アップだ。

——さて、もう全部大丈夫かな。後はおばあちゃんにモモのことお願いして……と。

百花が不思議そうに、出掛けようとする梓に声を掛ける。

「ねえママ、あのさー」

「ごめんね、もう行かなきゃ。モモが寝る前に帰ってくるから、おばあちゃんと待っててね」

「そうじゃなくて、ママはなんでいつも同じ服でおでかけするの？」

——うっ……痛いところを……

記憶力抜群の百花は、保育園の行事のときも、ママ友との食事会のときも、取引先や町内会の飲み会に顔だけ出すときも、梓が常にこの格好だったことを覚えているのだ。

「マ、ママは、これが好きだから……だよ？」

お金がもつたないし、忙しすぎて、買いに行くのも面倒で……とは、流石さすがに言えない。

「もつと明るい色がいい。ママは、ピンクと水色が似合うと思う」

「いいの。黒が好きなの」

まだ子供だと思っていたが、なかなか侮あなごれない指摘だ。だがあまり女性らしい格好をして夜歩いているとナンパされたりして怖いし、目立たない黒い服のほうが安心できる。

——女の子って、六歳にもなると色々大人になるのね。

とほほな気分、梓は身をかがめて百花をハグした。そのとき、身体がちよっと熱いかもと気付く。

「あれ、モモ、お熱ある？ 喉痛い？ お腹は？ 大丈夫？」

矢継ぎ早に尋ねると、百花は首を横に振った。

大丈夫なようだ。梓はほっとして、お茶を飲んでいる祖母に頼み込んだ。

「ねえおばあちゃん、もしモモが熱出したらすぐ連絡くれる？ 今日のお店そんなに遠くないから即帰ってくるから！」

「いいわよ。元気そうだから大丈夫だと思うけど。あずちゃんはお友達と食事でしょ、たまには息抜きしてきなさいよ。そんなに毎日頑張ってたら、貴女こそひっくり返るわよ？ ねー、モモちゃん」

百花が甘えたように祖母に抱きつく。確かに……熱は気のせいかもしれない。元気そうだ。

「わかった。ごめんね、じゃあ行ってきます」

梓はそう言い置いて、祖父の家を飛び出した。時計を確認するとギリギリの時間だ。取引先のCEOを待たせてはならない。梓は全力で、駅まで走った。

しばらく電車に揺られ、ガレリア・エンターテインメントの最寄り駅に着く。

梓は指定されたカフェへ急いだ。あまりこの駅を使ったことがない梓でもすぐにわかる場所に、カフェがあった。

なんとなく千博らしい。彼は相手のことを考えて、困ったり迷ったりしないよう指示するのが上手な人だったな、と思い出す。梓もデートの待ち合わせで迷ったことは一度もなかった。

——やっぱりモモは、あの人に似て頭がいいのかも。

つついとお留守番中の百花のことを考えつつ、梓はコーヒーを頼んで席に着いた。こんな洒落たカフェに来るのは久しぶりだ。白で統一された店内はクリーンなイメージで、柱やテーブルの一部にだけ、コーヒーをイメージしたダークブラウンと、差し色として銀があしらわれている。所々に置かれた観葉植物も爽やかで、いい気分になった。

——モモがもう少し大きくなったら、こういうお店に一緒に来られるかな。正人は……私じゃなくて彼女と来たいよね。

非日常に身を置くと、一気に気分が上がる。一杯千円という、普段では考えられないコーヒーの値段も、今は見ないことにして頼んだ。

好奇心からメニューを覗くと、スイーツもどれも手が込んでいて、美味しそうで食べてみたくなる。

——やっぱり、モモと一緒にスイーツ食べにこよう。あの子、甘い物好きだから。きつと、ぶりぶりの頬に笑みを浮かべて大喜びするだろう。

こういときは、子供が女の子でよかったなあとと思う。

梓は運ばれてきたコーヒーに口を付けた。普通のブレンドなのに、特別な味に感じる。うっとりしながら飲み終えた頃、店員に伴われて千博が歩いてくるのが見えた。

「ごめん、お待たせ」

微笑んだ彼の口調は、別れる前、恋人同士だった頃と同じだった。

梓の胸が、不本意にも小さく弾む。

昔のような笑顔を返しかけ、梓は慌てて立ち上がって深々と頭を下げた。

「こんにちは、斎川さん。本日はお誘い頂き、ありがとうございます」

顔を上げた梓の前で、千博がかすかにせつなげな笑みを浮かべた。

整った顔には、洗い清めたような清潔感が漂っている。まっすぐな形のいい眉は知性的で、黒い切れ長の目には柔らかな光が宿っていた。

やはり千博は、出会った頃と変わっていないのだ。

あの頃の彼は『弟の塾の先生』だったけれど、日本有数のエンタテインメント企業のCEOになっても、梓に向けられる誠実で穏やかなまなざしは同じだった。

「……いや、俺のほうこそ楽しみにしていた。行こう」

口調を改め、千博が紳士的な口調で言った。梓はかすかに頬を赤らめ、伝票を探す。

千博を案内してくれた店員が『もう済んでおりますので』と小声で教えてくれた。

どうやら千博が入店時に払ってくれたらしい。

少し考えた末、梓は千博に深々と頭を下げた。

「申し訳ありません、ご馳走になってしまって」

「いや、待たせたのはこっちだから」

引き締まった唇に笑みを湛えて、千博が首を振った。

千博と二人店を出て、梓は周囲を見回す。雑踏から見上げる夜のビルは、硬質な光を放って星のように見えた。

——ほんとに、非日常って感じ……

いつもなら、モモや正人と夕飯を食べつつ、モモに『今日はママも早く寝ましようね！』なんて叱られたりしている時間だ。

梓はそっと傍らを歩く男を見上げた。

相変わらず、なにも言えなくなるくらい完璧な形の横顔だ。

こんないい男なのだから、どれほど不誠実に振る舞っても女性のほうが離れていかないだろう、なんて想像したこともある。

だが千博はいつも誠実で真面目で、安心感だけを梓に与えてくれた。

——育ちがよさそうな人だなんて思ってた。そして、実際にすごくよかつたわけで。

ほろ苦い想いで千博からそっと視線を外したときだった。

「千博さん！」

女の声と、ハイヒールで駆け寄ってくる足音が聞こえた。

はっとして振り返ると、とても高価そうなブランド物に身を固めた女性が駆け寄ってくる。

ちよっと派手だが会社の人に違いないと思い、梓は慌てて一歩引いた。

千博が梓を背に隠し、女性に向き直る。梓は彼の背後で女性に頭を下げた。だが、女性は梓を無視して千博に微笑みかける。

——あれ、今、わざと無視された……？

打ち合わせ後に紹介されたガレリア・エンタテインメントの社員たちは、みな知的で礼儀正し

かった。流石さすがは一流企業と感心させられたのに。不審に思う梓の前で女性が、甘い甘い砂糖菓子のような声で千博に言う。

「今日は私とお食事に行ってくださいませんか？」

「こんばんは。申し訳ないですが、先ほどもお断りしたとおり、先約が」

「父が取ってくれた料亭ですのに。お約束は今度になさったら？」

ますます異変を感じる。

社長の予定にこんな風に口を挟む社員なんているはずがない。梓ですら、仕事中は祖父を社長として立てているのに。

「峰倉みねくらさん、お父様のご厚意を無下むげにしてしまうのは心苦しいのですが……今日は予約の時間が迫っているので失礼します」

穏やかな口調で千博が言い、女性に背を向ける。

戸惑って二人を見比べる梓の肩を抱き、千博がさつきより少し足早に歩き出す。

——か、肩に……手……

千博との距離が近づき、梓の鼓動が速まった。気品あひら溢れるオーデオロンの香りが、かすかに漂ってくる。

誰の鼻先も邪魔しないくらい控えめな、それでいてうっとりするような懐かしい香り。出会った頃から同じ香りを愛用し続けているのだろう。梓の鼓動が更に強まる。そのとき不意に、峰倉と呼ばれた女性が背後で鋭い声を上げた。

「どなたですの、その方」

千博が梓の肩を抱いたまま、ゆっくりと振り返る。

「……私の友人です」

「夜にお食事に出られるような女性がいるなんて、聞いてませんか？」

きつい声音に、梓の困惑が増す。もしかして千博の恋人なのだろうか。だが千博の態度はどこか拒絶的で、彼女への愛情は感じられない。

——この方、どなたなのかしら。

峰倉は千博を見上げ、赤く塗った唇でふたたび問うた。

「第一、千博さんがアメリカに渡る前に、取り決めましたよね。うちの会社との事業提携は、私との縁談あったものだって。それを父が『婚約せずとも業務提携する』と妥協して、斎川グループにお力添えしたのですよ。結婚の話も守ってもらわなくては困ります」

峰倉の声が大きくなっていくのを見かねてか、珍しく千博が厳しい声で言った。大きな声ではないが、ぴしりと鞭打むちつような鋭さだ。

「当時はそうでしたね。ですが、申し上げづらいですが、今は……」

なにかを言いかけた千博が、はっとしたように一瞬梓に目をやった。人に聞かせたくない話なのかもしれない。

「申し訳ありません、そのお話は後日、お父様を通してお願いできますか」

「どうしてもダメなの？」

「ええ、彼女が先約ですの。申し訳ない」

峰倉が不満げに眉根を寄せる。彼女は梓を睨みつけると、吐き捨てるように言った。

「……次は私のために時間を作ってくださいませ。どうぞお忘れなく」

言い終えると同時に、女性がふいと背中を向けて去っていく。嘩然とした梓に、千博が申し訳なさそうに言う。

「ごめん。峰倉さんは梓……いや、鈴木さんに出会う前にお見合した相手なんだ。結局彼女は別のお相手と結婚したんだけど、なんていうのか、色々あって離婚されて……いや、君には関係ない話だ。驚かせて申し訳なかった」

梓は頷いた後、呆れた口調で言ってしまった。

「困りますよね、斎川さんにも予定がおりなのに」

軽く冗談めかした梓の言葉に、千博が微笑んだ。

「正直言うと、そのとおり。元々お見合いも断るつもりだったし。そもそも、俺は誰とも結婚する気がないからね……とにかく彼女のことは気にしないでくれ、行こう」

梓の肩から手を離し、彼は少し先を歩き出した。

——そうなんだ。結婚する気、ないんだ。

千博の傍らで、梓は不思議な気分になる。もったいないな、いい男なのに、と思った。

五分ほど歩くと、住宅街に入った。都心の高級住宅街にもかかわらず、家と家の間隔が広がって行く。いわゆる、昔ながらのお金持ちが住む辺りだ。

こんな住宅街にレストランなんてあるのかな、と不思議に思っていたところ、千博はとある門の前で足を止めた。

とても地味で見過ごしそうになるけれど、よく見ると洋風の凝った門扉だ。千博がチャイムを鳴らすと、中からギャルソン姿の姿勢のいい男性がすぐに迎えに出てきた。

「いらつしやいませ、斎川様」

品のいい明るい対応だった。緊張する梓の腕をそっと引き、千博が微笑みかける。

「会員制のレストランなんだ。母が気に入っていてね、家族でよく利用しているし、知人を連れてきたときの評判もいい」

説明を聞きながら、梓はごくりと息を呑む。エントランスの右手には、ガラス張りのワインセラーがあり、奥のほうからは茜色の光が漏れ出している。シダーウッドの香りがほんのり立ちこめ、木張りの瀟洒な店内を、森のような雰囲気を見せていた。

——わ、私が来たことがないような、すごいお店。

梓はちよっぴり後悔する。

百花が勧めてくれたとおり、もう少し『素敵なお洋服』で来るべきだった。

とはいえ、お金はついつい百花に回してしまって、梓には素敵な服の持ち合わせなんてないのだから。

案内されたのは窓際の広めの席で、ライトアップされた庭が見える。秋薔薇が咲いていて、雰囲気満点だ。

先ほどのカフェも、このレストランも、別世界だ。こんな場所にいることが夢のように思える。

——モモが大きくなったら連れてきてあげられるかな。頑張って働けばたまには来られるかも。あの子、美味しいもの好きだから。

梓はナプキンを膝に広げ、庭の深紅の薔薇に見入った。こんな一等地にあるのに、店の敷地はとても広そうだ。奥行きがあるのがわかる。

「ここは旧華族の別荘の跡地なんだ」

目を丸くして庭に見入る梓に、千博が言った。

「昼に来てても雰囲気がいい。庭が綺麗で」

「よくいらつしやるんですね」

「家族だね」

そうか、千博の家族は仲がいいのか、と思い、梓は口元をほころばせた。

「私も……」

いつか娘を連れてきたい、と危うく口走りかけ、梓の顔が凍り付く。

——き、気が緩むと危ないわね。

「お、弟と来たい……ですね」

不自然極まりない口調になった気もするが、なんとか誤魔化した。

千博はミネラルウォーターの入ったグラスを傾け、ちよつとだけ意地の悪い口調で尋ねてくる。

「恋人ではなく？」

「ええ。私、家族優先だから、恋人とか……いない感じ……です……かね……」

目を泳がせながら梓は答える。今の答えは大丈夫だろうか。多分大丈夫だ。

というよりも、自分は普段、会社関係の人と家族、それと百花の学校関係者やママ友としか喋っていない。

狭い世界で同じことを繰り返す日々から、突如非日常のキラキラした場所に連れてこられて、舞い上がって頭が働かなくなっている。

しかも一緒にいる相手は、未練を残して別れた昔の恋人だ。

別れた頃よりもぐつと男らしく魅力を増した千博に見つめられると、正直、そわそわする。

この状況で『モモ』のことを隠し通さないといけないのだ。

梓にそんなことができるのだろうか。

——まずい、来ないほうがマシだったかな。この調子だと、さっさと帰る計画どころか……。私、昔も似たような失敗をした気がする。どうして千博さんと呼ばれると会つちゃうんだろう。

自分の嘘の下手さは、自分自身が一番よく知っている。梓は熱くなった顔で目を逸らし、もう一度庭の薔薇に目をやった。

「俺も恋人はいない」

不意に千博が呟く。低く真剣な声音だった。驚いて顔を向けた梓に、彼はまっすぐに視線を注ぎながら言った。

「昔、君と別れてから一度もない。君が忘れられなかった。本気で結婚を考えるくらい好きだっ

たからね。あれは若気の至りじゃなかった」

突然切り出され、梓は凍り付く。千博の表情は、かすかに悲しげに見えた。

「驚いたかもしれないけど、今日は君とその話をしたくて来た。梓と再会できたのは運命のような気がするから」

心臓がひっくり返りそうになり、梓は弱々しい声で答えた。

「こ、困ります」

「困ってもいいから、少し時間をくれ。話だけでも最後まで聞いてほしい」

意外な強引さに梓は身じろぎする。柔らかく丁寧なのに、抗えない強さを秘めた言葉だった。

——そっか、大企業のCEOだもの、穏やかで優しいだけじゃない……よね。

黙って話の続きを待つ梓に、千博は言う。

「今日食事に誘ったのも、仕事なんか関係なく、君と話す時間がほしかったからだ」

確かに受け取ったメールには、仕事云々のことなど、なにも書かれていなかった。

俯いた梓に、千博がたたみかける。

「馬鹿みたいだと思われるだろうけど、本当に、再会できたのは運命かもしれないと思ったんだ」

「い、いえ、あれは、たまたま坂本さんが、祖父たちが作った製品に目を留めてくださって」

「君はさつきからなぜ、そんなに気もそぞろなんだ？」

梓を見つめたまま、千博が首をかしげる。

「それは、その、こんなお店来たことがないから、落ち着かなくて」

「……君くらい綺麗なら、いくらでも連れてきてくれる人がいるだろうに。そういえばこの七年、君はなにをしていたの」

——子育てと祖父の会社の手伝いしかしておらず、貧乏の穴を埋めるために必死でした……

やはり、気の利いた嘘は梓の口から出てこなかった。独身で働いている二十代の女性が、普段どんな生活をしているのかよくわかっていないので、なにも考えつかないのだ。

食事に誘われた後、事前にシミュレーションしておけばよかったのだが、毎日気絶するようにしていたせいで、そんな余裕もなかった。

——私、やっぱり来なければよかった、馬鹿。

なにも言わない梓の手に、千博が目を留める。怪しい絆創膏だらけの手だ。痛ましげに眉をひそめ、千博が不思議そうに尋ねる。

「どうしたんだ、その手」

「えっ、あ、大丈夫、これは段ボールを三十センチ四方に切ってなんて急に言われて、慌てて作業したから、こんな風に切っちゃって」

梓の言葉に千博が首をかしげた。

「三十センチ四方？ 変わったオーダーだね。なにに使うの？ おじいさんの会社の梱包資材か？ でもそんなの手作業でやっていたら間に合わないよな」

妙に具体的な数字を出したので、千博が食いついてくる。そういえば彼は数字に興味を示すタイプなのだった。

「あ、あわ、えと、正人が学校で」

——って、そんなこと頼まれるわけじゃないでしょう。あの子はもう大学生！ も、もう駄目、落ちて着いて。

梓は慌てて言い直す。

「違います、正人じゃなくて、祖父が預かってる親戚の子が、小学校の授業で使うって言うので。なに言ってるんでしよう、私」

「そんなに緊張しなくて大丈夫だ」

明らかに挙動不審になった梓を、千博が優しくフォローしてくれた。

「ご、ごめんなさい、本当に」

汗だくになりながら、梓は答えた。

「色々俺に話せないことがあるんだろうな。ごめん、問い詰めたりして。でもどうしても、離れている間、梓がなにをしていたか知りたくて」

——育児……です……

とは言えず、梓は神妙に黙りこくる。

「俺の七年間は仕事だけだった。話を戻すけど君のことが忘れられなかったからだ。話し合いもできないままアメリカに行くことになってしまっ、納得できなかった。時間が経ってもずっと」

話題がふたたび戻された。流石はガレリア・エンタテインメントの若きCEO。あっさり本題を忘れてしまうような相手ではないのだった。

「あ、あの、私は、忘れ、て……ました」

ひどい台詞を口にして、うしろめたくて心が痛む。どうやらこの辺が梓の良心の限界のようだ。

「それはなんとなくわかってる。連絡もくれなかったし」

かすかにほろ苦い笑みを浮かべ、千博が言う。

「だけど、過去のことはいい。単刀直入に言う。梓、もう一度俺とやり直してほしい。迷惑だと言うならその根拠を話してくれ。本当にどうしようもない理由以外では諦めたくない」

まっすぐで真摯な、千博らしい告白の言葉が、梓の心をプスリと突き刺した。

思考が停止する。反論する言葉も受け流す余裕も、どこからも出てこない。

「こ、根拠……？」

百花もとても理屈っぽいし、梓の誤魔化しが通じない子だけれど、千博は六歳児の相手とは訳が違う。

——モ、モモに論破されることさえある私が……その上級バージョンに勝てるわけが……

「も、もう時間が経ったから、好きじゃない……かも……？」

だが、良心の呵責がひどすぎて、これ以上の拒絶の言葉が出てこない。

「じゃあ、また付き合ったら、俺の長所を見直してもらえる可能性があるな。……昔は頼りなかったかもしれないけど、今は少しマシになったはずだから」

千博の口調は穏やかだが、ぐいぐいと迫ってくる。紳士的でスマートなのは振る舞いだけで、心は怖いくらい本気なのがわかる。ロックオンされていると悟って梓が俯いたとき、鞆の中でスマー

トフォンが鳴った。

途端に、どきどきと息苦しい気持ちで吹っ飛んだ。

——あ、やっぱりモモが熱出したかな？

梓は慌てて千博に告げる。

「ごめんなさい、急ぎの用かもしれないからメールを見てもいい？」

千博がもちろん、と頷くのを見届けて、梓はスマートフォンを取り出した。差出人は正人だ。

『ちよつと熱があるかもだから、熱冷ましシートを貼っておいたよ』

おでこに白いシートを貼られた百花の写真が添付されている。目を瞑って横になっている。いつも写真を撮るときは起きてポーズを取る子なのに。

——あれ……モモ、結構具合が悪いのかも。どうしよう。

梓は眉をひそめて写真を見つめた。

千博を誤魔化していること、熱がある百花を祖父母と正人に預けていること。様々な不安要素が

どうしようもなく膨れ上がり、梓は俯いた。

正人も祖母もちゃんと百花を見てくれるのはわかっているが、帰りたい。

そもそも、きつちり誘いを断って、ここに来なければよかったのだ。逢いたくないと、にべもなく言い切ればよかった。

——私の中にも、少しだけ、千博さんとまた話したい気持ちがあったから……

落ち込んだ梓の様子に気付いたのか、千博が心配そうに言う。

「どうした？」

「あ、あの、子供が熱出しちゃって……あ、預かっている子供が」

ギリギリのところで言い訳は間に合った。目を伏せる梓に、千博は言う。

「ああ、そうか、だから心配してるのか。ごめん、今日なんだか様子がおかしいのは、預かっているお子さんが体調悪いからだっただな」

千博はどうやら納得してくれたようだ。彼は店員を呼び、急用で帰らねばならないことを告げ、可能であれば作った料理を包んでほしい、とオーダーした。

急いで戻ってきた店員が『二十分ほどお時間を頂ければ、メインとデザートはお包みできます』と教えてくれる。

どうやら千博の家族がこの常連なので、シェフが気を利かせてくれたようだ。

——ごめんなさい、本当にごめんなさい……

申し訳なくて、梓はなにも言えなくなる。迷惑を掛けてしまった。

食事の代金だって掛かるし、千博はわざわざ時間を空けてくれたのに。

それもこれも、梓の中途半端さがいけなかった。忘れられなかった元恋人がどんな風変わったのか、久しぶりに確かめてみたい……という好奇心があったのは否めない。

そうでなくても、彼は人生で唯一好ましいと思った男性だ。強い意志で拒まなければ、話くらいしたくなるのだ。

——私が隙だらけだった。どうしよう。

しばらく待つと、料理の詰まった見事な紙袋が運ばれてきた。

「家で食べるといい。今日中なら食べられるそうだから」

「ごめん……なさい……」

「いいんだ、病気の子を優先しよう」

千博はやはり、どこまでも紳士的だ。告白し、よりを戻そうと迫っている途中だったのに、困っている梓にその話を蒸し返そうとはしなかった。

せつかく訪れたレストランを出て大通りまで辿り着くと、千博がタクシーを止めてくれた。

「なんか、梓が危なっかしい感じだから家まで送らせてくれないか」

躊躇したが、梓は頷いた。この時間は道も混んでいないし、タクシーのほうが早く帰れそうだ。

いつの間にか『梓』と呼び捨てされていることを気にする余裕もなく、梓は千博と二人でタクシーに乗り込む。

「本当にごめんなさい。食事の支払いとか、私がします」

そんなお金をどこからひねり出そう、と思いつつ、梓は申し出た。とはいえ、こうするのは当たり前だ。一方的に梓の都合で今日の席を台無しにしてしまったのだから。だが千博は、笑顔で首を横に振った。

「また付き合ってくれたらそれでいいよ」

「えっ……また……？」

戸惑いが生まれる。それはそれで心情的に辛い。梓だつて憎くて別れたわけではないからだ。

できればもう逢わずに、別の世界で生きていきたいのに……

だが、なぜか、即答で断ることはできなかった。多分、かすかに残った未練が梓を愚かな人間にしているのだろう。

——私、千博さんに押し切られないようにしなくちゃ。

梓はなにも答えずに、窓の外に目をやった。

タクシーは十五分ほどで祖父の家の前に着いた。

『鈴木製作所』という古い看板を見上げ、千博がしみじみと呟く。

「そっか、ここが梓の家なんだ」

「正しくは祖父の家なの。私……弟と隣のアパートに住んで」

千博が無言で、地震で倒れそうなボロボロのアパートに目をやった。

このアパートは隙間風がひどいので、冬は着替えだけ持って祖父の家に泊まりに行くこともある。そのくらい、古くて頼りない、壊れそうな建物だ。けれど昨今急激に家賃水準が上がったこの辺りには、梓に借りられる家が他にない。

——これでわかったかな。千博さんと私が付き合えない理由……

この家を見たら、千博も流石に『引く』はずだ。自嘲と共に、ふと父のことを思い出す。

——どんな人でも、突然私を捨てていなくなる可能性があるんだから。お父さんのことだつて、私、大好きだったのに。

普段考えることはないが、父のことは、やはりまだ心の傷のようだ。梓は薄暗い記憶を振り払う

ように顔を上げた。

傷つきたくない。人に背を向けられたくない。千博に深入りする前に、早く距離を置こう。そう決めたとき、家の中から弾丸のように百花が飛び出してきた。

——えっ、寝てたんじゃ？

「ママお帰りなさい！」

硬直する梓の様子などお構いなしで、百花が元気よく叫んだ。

「……あ、た、ただいま……」

思いっきり『ママ』と呼ばれてしまい、全身から汗が噴き出す。千博の視線が痛い。

「ママ、熱あるからアイス買っていい？ マー君と一緒にアイス買いに行つていい？」

元気溢れる叫びに、梓は絶句する。

うしろからゆっくり出てきた正人が、呆れたように百花を叱った。

「夜だぞ、声がかいって」

梓は汗だくになりながら、恐る恐る正人に尋ねた。

「あ、あの、元気だね、モモ。写真見てびっくりしたの、寝込んだのかと……」

「あの写真のときは、おでこに冷却シート貼つたら、勝手に病気のお姫様ごっこ始めたんだよ。起こしても笑うだけで起きないの。具合は、メールに書いたとおりちよつと熱っぽい感じなだけ。さつき体温計で計つたら、平熱だったよ。単に昼間遊びすぎて興奮してるだけかも」

梓はほつとして、モモの頬を挟んで上向かせる。元気そうだ。プリプリした小さな顔は色艶もよ

く、顔つきもしっかりしている。

「ママ、これ毎日貼つていい？」

百花がおでこの冷却シートに触りながら、真面目に尋ねてきた。

——そ、そっか。あんまり熱出さないから、貼ってもらおうの珍しいもんね、モモ……特別な気分ですます元気なんだね……

なにも言えない。百花は梓の腰に抱きつき、ふたたび甘え声で言う。

「ねえママ、アイス食べたいな、モモ熱があるから」

「アイスは駄目。もう七時すぎでしょ？ お熱がないならお風呂入って寝よう？」

「梓」

低い声が、百花と梓の会話に割り込んだ。

「あ、あの、すみません、送って頂いて」

百花を抱きしめたまま、梓は恐る恐る千博を振り返った。

彼の顔は、文字どおり『蒼白』だった。

異様な雰囲気、梓は硬直しつつ尋ねる。

「ど、どうしたんですか？」

千博の視線は、百花に注がれていた。

彼は梓の問いに答えず、今にも倒れそうな顔色のまま百花の前にかがみ込む。

「……こんばんは、俺は斎川千博と言います。お嬢さんのお名前教えてくれるかな」

「鈴木百花です」

あまり人見知りをしない百花は、素直に答えた。

「パパは？」

——ど、どうしてそんなことをモモに聞くの？

おろおろと様子を見守っていると、正人が『この人、どこかで見たような……』とばかりに、千博の顔を見つめて腕組みしていた。

「パパは、うちにはいません」

百花が梓の腕から抜け出し、乱れたおかつぱ頭を手で直しながら答えた。梓が連れてきた人なので、お客様だと思っただけらしい。

「……どうしてパパはいないの？」

千博の声の真剣な響きに驚いたように、百花も真面目な口調で答える。

「どっか行っちゃったから。うちには、ママとマー君しかいません。おじいちゃんとおばあちゃんも、モモのパパがどこ行ったか知らないですよ！」

「そうなんだ。じゃあ、パパのお名前とかは知ってる？」

——ちよつ……待つ……やめ……

焦りのあまり動けない梓の前で、百花がハキハキ答える。

「ちひろ。百花は百で、パパは千なんだって」

なにをどうしていいのかわからずフリーズしたままの梓の前で、正人がポンと手を打った。

「あ、もしかして先生じゃないですか？ 名前忘れちゃってごめんなさい。だけど、昔、ちよつとだけ塾にいた……あの……」

言いながら、正人もなにかに気付いたようだ。

『先生』が塾からいなくなっただけらしくして、姉が身ごもっていることがわかったのだ。そしてその『先生』は鬼気迫る形相で、幼い百花に『お父さん』のことを聞いている……

愛想笑いを浮かべていた正人が、無表情になって口をつぐむ。日焼けした顔には緊張の色が浮かんでいた。

異様な雰囲気の中、一人状況をわかっていない百花が、明るい声で叫ぶ。

「ママ、アイス買いにいこう」

——モ、モモ、ママはそれぞれどこじゃ……

ごくりと息を呑んだ梓の前で、かがみ込んでいた千博がふらりと立ち上がる。

「梓」

「ハ、ハイッ」

うわずった変な声が出た。

「俺の娘……だよな？」

「……い、いや、あの……それは違います……モモ、千博さんに似てないと思う……」

「あやふやなことを口走る梓の両肩を掴み、千博が震え声で言う。」

「そっくりだよ。生き写しだ」